

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 5 月 20 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2023

課題番号：18K03125

研究課題名(和文) 児童養護施設入所児の愛着と適応に関する縦断研究 - 幼児期と青年前期の比較 -

研究課題名(英文) A longitudinal study on attachment and adaptation of children in children's homes: A comparison of early childhood and adolescence

研究代表者

桂田 恵美子 (KATSURADA, Emiko)

関西学院大学・文学部・教授

研究者番号：90291989

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：児童養護施設で暮らす子どもたちの幼児期から青年前期の愛着パターンは継続性があることが示された。愛着パターンが継続した者は8名(47%)であった。愛着の4分類における2検定の結果は有意であった。青年期前期の適応においては、現在の愛着が安定型の方が不安定型よりも「思考の問題」得点が有意に低かった。幼児期の愛着の分類でみると、その違いは有意傾向であった。施設生活での適応に関しては、とらわれ型(不安定型の1タイプ)の子が、他の愛着タイプよりも適応している傾向が見られた。並行して、とらわれ型の子は作文の内容の評価が有意に低かった。学校生活の適応においては愛着タイプによる違いは見られなかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

幼児期から青年前期までを児童養護施設で生活する子どもの愛着パターンは比較的変わらないという結果は、ネガティブなライフイベントがない場合、乳幼児期に形成された愛着は変わらないというこれまでの愛着研究で言われていることを支持するものである。一方で、施設という安定した生活環境においても子どもの不安定な愛着を安定した愛着に変化させることが困難であることを示している。また、不安定な愛着を有する者は強迫観念や幻聴などを含む思考の問題得点が高いことが示され、精神病理を発症するリスクが示唆された。その為、ケアワーカーは不安定型愛着の子どもに対して特別なケアが必要であると言える。

研究成果の概要(英文)：The results indicated that attachment patterns were relatively consistent from early childhood to adolescence in teenagers who lived in children's homes. Eight out of 17 teenagers (47%) kept the same attachment patterns. In the four classifications of attachment pattern, analyses showed significant association of the attachment types at two time points. In terms of children's adaptation, the adolescent with secure attachment had significantly lower level of "thought problems" than did those with insecure attachment. When the attachment classification in early childhood was used, this difference was marginal. The results of children's interviews revealed that preoccupied (one of the insecure attachment patterns) teenagers had better adaptation in the children's home compared to those with other attachment patterns and they also had significant lower scores of a composition test. At school, however, no significant difference was found in teenagers of different attachment patterns.

研究分野：発達心理学

キーワード：愛着 幼児期 青年前期 適応 縦断研究 児童養護施設入所児

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) Bowlby の愛着理論 (1969) によると、乳幼児期に形成された愛着パターンは個人のインターナルワーキングモデルの基となり、その後の人間関係や精神衛生に影響をおよぼす。安定型愛着パターンを持つ者は上手く人間関係を築くことができ、精神的に健康であるとされる。しかし、Bowlby (1988) は乳幼児期に形成された愛着パターンがそのまま成人の愛着パターンになるわけではないことも述べている。愛着パターン測定後の生育環境が一定している場合は変わることは少ないが、愛着対象者との死別や離別など個人の生育環境に大きな変化がある場合は変わる可能性があるという。

愛着パターンの継続性/非継続性についての先行研究は、2時点の長さ(乳児期と幼児期、あるいは幼児から思春期)や対象となる子どもの特徴によって違いが見れる。McCarnell & Moss (2011)の先行研究のレビューによると、乳児期から幼児期(5~6歳)の愛着パターンの安定性は80%台から60%台であるという。また、乳児期(12ヵ月)から思春期(16~19歳)の愛着パターンの継続性は38%~25%と低いものであったと述べている。これらの研究の対象サンプルは一般家庭の子どもたちであり、親との長期的な分離を経験し、児童養護施設という特殊な環境で生活する子どもたちを対象とする研究は含まれていない。

(2) 我々は、2010年度に科研費の助成を受け、児童養護施設に入所している幼児を対象に愛着と問題行動の関連について実証研究を行った。その研究では、無秩序・混乱型愛着パターンは虐待を受けた幼児に多く見られ、その無秩序・混乱型愛着をもつ子どもは外向的問題行動(攻撃行動や非行行動など)が多いという結果を見出した(Katsurada, Tanimukai, & Akazawa, 2017)。この研究で対象となった子どもたち(当時は幼児や小学校低学年)は、すでに、中学生・高校生となり、多くの子どもがまだ同じ施設に入所している。同じ環境で長く暮らし、施設のケアワーカーとの関係性も深まることにより、幼児期に不安定であった愛着が安定した愛着に変化するかもしれないと考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の第1の目的は児童養護施設という一定の環境で暮らしている子どもの愛着パターンの変化を幼児期と青年前期の2時点で縦断的に検討することである。

(2) 第2の目的は幼児期で比較的明確に表れた愛着パターンと社会適応との関連について、青年前期においても見られるのか、また、幼児期の愛着パターンは青年前期の適応に影響しているのかを検討することである。

3. 研究の方法

(1) 参加者: 幼児期の愛着と適応の関連の研究に参加してくれた北陸・近畿地方の3つの児童養護施設が引き続き本研究にも協力してくれた。参加児童は34名(男子15名、女子19名)で、平均年齢は14.61歳(SD=1.52)であった。その内、幼児期の愛着研究に参加した子どもは17名(男子7名、女子10名)であった。この17名の平均年齢は15.07歳(SD=1.58)であった。

(2) 幼児期の愛着測定具: The Attachment Doll Play Assessment (ADPA; George & Solomon, 1990, 1996, 2000)を使用した。ADPAは、規定されたドールハウスセットを使い、使用する人形を子どもに選択させた後、ストーリーの最初の部分のみを提示し、人形を使ってそれに続くストーリーを子どもに自由に作らせるものである。幼児期から児童期(4~9歳)の子どもの愛着表象を測定するものとして開発された。ストーリーは迷子のペット(練習用)、膝の怪我、寝室のお化け、親(大人)との分離と再会の4つストーリーから成る。子どものドールプレイの様子はビデオに録画され、その録画を基に子どもの行動の記録と発話の逐語録を作成する。その逐語録をマニュアルに従いコーディングし、愛着の4つのパターン(安定型、回避型、アンビバレント型、無秩序型)のいずれかに分類する。ADPAの日本での妥当性は山川(2006)によって示されている。本研究での愛着の分類は、ADPAのワークショップで訓練を受けた後、コーディングの認定を受けた研究代表者が行った。愛着分類の信頼性を確認するために、別の認定コーダーである日本人研究者に半数のケースのコーディングを行ってもらった。全体の分類の一致率は84%であり、D分類に関しては100%であった(Katsurada, Tanimukai, & Akazawa, 2017)。

(3) 青年前期の愛着測定具: The Adult Attachment Projective (AAP; George, West, & Pettem, 1997)を使用した。AAPはADPAの開発者の一人であるCarol Georgが主体となり、青年・成人期の愛着の防衛プロセスに着目し、青年・成人の愛着表象を測定する測定具として開発された。AAPは一人または二人の人物が描かれた8枚の絵を参加者に提示し、それぞれの描画がどのような場面で、どうしてこのような場面になったのか、描かれている人物は何を考えているのか、この後どうなるのかを聞き、ストーリーを作ってもらう。ストーリーは録音され、逐語録を作成後、

マニュアルに従い4つの愛着パターン(柔軟型、拒絶型、とらわれ型、未解決型)に分類される。AAPはThe Adult Attachment Interview(AAI; George, Kaplan, & Main, 1985)との収束的妥当性が報告されている。本研究では、研究代表者によって英語に翻訳された逐語録に基づき、AAPの開発者であるCarol Georgeが全ての判定をおこなった。

愛着パターンの呼名は測定具によって多少の違いはあるが、柔軟型は安定型、拒絶型は回避型、とらわれ型はアンビバレント型、未解決型は無秩序型と同じパターンとされる。

(4) 質問紙調査

対人的信頼感: 谷(1998)が基本的信頼感尺度、絶望感尺度、時間的展望体験尺度の全項目の因子分析をおこなった結果4因子が抽出された。その内の1因子である対人的信頼感因子5項目を使用した。

アダルト・アタッチメント・スタイル尺度(ECR-RS): 古村他(2016)の回避6項目と不安3項目の9項目を使用した。

日本語版主観的幸福観尺度: 島井他(2004)によって信頼性や妥当性が確立されている尺度4項目を使用した。

ユースセルフレポート(YSR): 11~18歳までの子どもの行動チェックリストで、110項目である。YSRは「引きこもり」、「身体的訴え」、「不安/抑うつ」、「社会性の問題」、「思考の問題」、「注意の問題」、「非行的行動」、「攻撃的行動」の8下位尺度から成り、標準化されている。福岡心理テストセンターより販売されている日本語版を使用した。

施設内で子どもの成長を見て来た職員に、青年期にいたるまでのライフイベントについて聞いた。具体的には、親しかったケアワーカーとの分離があったか、家族・親族との死別があったか、いじめの被害やネガティブ、ポジティブイベントがあったか等を聞いた。

(5) 面接調査: 青年期の適応については、子ども一人一人に施設内での生活や学校生活について、仲の良い友達が何人いるか、信頼できる友達や先生がいるか、部活をやっているか等について、半構造化面接をおこない、その後、各項目について適応という観点から点数化した。

(6) 作文: 参加者の認知的能力を確認するために、「10年後の自分」という題名を与え、400字詰め原稿用紙1枚程度の作文を書いてもらった。その作文は、形式面(長さ、誤字・脱字等)と内容面(内容の一貫性、テーマに沿っているか等)の二つに分けて評価基準を決め、点数化した。この評定は研究分担者の2名がおこなった。

4. 研究成果

(1) 青年前期の愛着パターンの分布

AAPの測定を受けた34名の愛着パターンは、柔軟型6名(17.6%)、拒絶型14名(41.2%)、とらわれ型3名(8.8%)、未解決型11名(32.4%)であった。

(2) 幼児期と青年前期の愛着の継続性/非継続性

幼児期(ADPA)と青年前期(AAP)の両時点での愛着測定を受けたのは17名であった。愛着パターンの2分類と4分類のクロス集計を表1と2に示した(次頁参照)。2分類では、ほとんどの者(約94%)が幼児期から青年前期において変化がなかった。2時点での愛着パターンの関連性は有意であった($\chi^2 = 8.56$, $df=1$, $p=.003$; $\phi = .767$, $p=.001$)。

4分類では、幼児期から青年前期において愛着パターンが変わらなかったのは8名(47%)であった。4分類においても2時点での愛着パターンの関連性は有意であった($\chi^2 = 21.07$, $df=9$, $p=.012$; $\phi = .253$, $p=.005$)。この結果から、児童養護施設で暮らす子どもの幼児期と青年前期の愛着は継続性があると言える。

(3) 愛着と問題行動との関連

青年前期の愛着パターン(AAP)と適応の関連については、ユースセルフレポート(YSR)の下位尺度「思考の問題」においてのみ愛着パターンによる違いが見られた。AAP2分類(安定/不安定)でのMann-Whitney検定の結果、安定型の平均ランクは9.58(度数=6)で、不安定型のランクは18.10(度数=26)であり、有意な差が見られた($U=119.50$, $p=.032$)。不安型のランクが高く、「思考の問題」得点が高い者が多いことを表していた。愛着パターンの4分類ではKruskal-Wallis検定をおこなった結果、「思考の問題」においてのみ有意傾向の差が見られた($H=3.45$, $df=3$, $p=.082$)。多重比較の結果は柔軟型(平均ランク6.83)と拒絶型(平均ランク10.83)間で有意傾向($p=.092$)、柔軟型(平均ランク5.08)と無秩序型(平均ランク11.14)間で有意($p=.012$)であった。4分類の結果から、不安定型の中でも特に拒絶型と無秩序型に「思考の問題」がある者が多いことが分かった。他の下位尺度においては、2分類でも4分類でも有意な差は見られなかった。

幼児期の愛着パターン(ADPA)の2分類においてもAAPと同様にYSRの「思考の問題」において有意傾向の違いが見られた($U=33.00$, $p=.082$)。これは、幼児期の安定型の3名の内2名が青

表1 幼児期青年前期の愛着の2分類のクロス集計

ADPA \ AAP	安定型	不安定型	計
安定型	2 (11.8%)	1 (5.9%)	3 (17.6%)
不安定型	0	14 (82.4%)	14 (82.4%)
計	2 (11.8%)	12 (88.2%)	17 (100%)

表2 幼児期と青年前期の愛着の4分類のクロス集計

		青年前期 (AAP)				
		拒絶型	柔軟型	とらわれ型	未解決型	計
幼児期 (ADPA)	A	3 (17.6%)	0	2 (11.8%)	0	5 (29.4%)
	B	0	2 (11.8%)	0	1 (5.9%)	3 (17.6%)
	C	1 (5.9%)	0	0	4 (23.5%)	5 (29.4%)
	D	1 (5.9%)	0	0	3 (17.3%)	4 (23.5%)
	計	5 (29.4%)	2 (11.8%)	2 (11.8%)	8 (47.1%)	17 (100%)

注) A = 回避型、B = 安定型、C = アンビバレント型、D = 無秩序型

年前期においても安定型を継続していたことから当然と言えば当然である。ADPAの4分類でも同様の結果であったが($H=8.46$, $df=3$, $p=.037$)、多重比較で有意差、有意傾向の差が見られたのは安定型とアンビバレント型間(平均ランク 4.00 vs 10.80, $p=.035$)、安定型と無秩序型間(平均ランク 4.00 vs 11.88, $p=.020$)と拒絶型とアンビバレント型間(平均ランク 5.64 vs 10.80, $p=.081$)と拒絶型と無秩序型間(平均ランク 5.64 vs 11.88, $p=.046$)であった。アンビバレント型と無秩序型に「思考の問題」がある者が多いという結果であった。

(4) 愛着と施設や学校での適応との関連

半構造化面接で得られた施設内での生活や学校生活における適応については、現在の愛着(AAP)の2分類では有意な違いは見られなかったが、4分類においては施設内での適応に有意傾向の違いが見られた($H=7.37$, $p=.061$)。多重比較では、柔軟型ととらわれ型間(平均ランク 3.92 vs 7.17, $p=.092$)、拒絶型ととらわれ型間(平均ランク 7.82 vs 14.50, $p=.037$)、拒絶型と未解決型間(平均ランク 10.21 vs 15.70, $p=.058$)に違いが見られた。とらわれ型が他のパターンよりも施設内での適応が良かった。一方で、とらわれ型は作文の内容評価において他のパターンよりも有意に低い傾向にあり($p=.075$)、とらわれ型の施設内での適応の良さは認知的な脆弱性によるものかもしれない。幼児期の愛着の2分類、4分類による施設内の適応、学校の適応いずれにおいても有意差は見られなかった。

(5) 愛着とライフイベントとの関連

幼児期から青年前期までのライフイベントと愛着パターンの関連については、友人との分離とネガティブイベントにおいてAAPの4分類での有意傾向の差が見られた。拒絶型の者は他の愛着パターンの者よりも仲の良い友人との分離を経験しており($\chi^2=7.29$, $df=3$, $p=.063$, Cramer $V=.463$)、ネガティブイベントの経験を持つ者も多かった($\chi^2=7.47$, $df=3$, $p=.058$, Cramer $V=.469$)。一方、安定型/不安定型の2分類では、ポジティブイベントで有意傾向の違いが見られ、ポジティブイベントを経験している者は全て不安定型愛着の者であった($\chi^2=3.29$, $df=1$, $p=.070$, Cramer $V=.370$)。つまり、不安定型愛着の者はネガティブイベントもポジティブイベントも経験していると言える。

(6) 質問紙での項目と青年前期の愛着との関連

質問紙で測定した、対人的信頼感、アダルト・アタッチメント・スタイル尺度(回避と不安)、主観的幸福感のいずれにおいてもAAPの愛着パターンの4分類による有意/有意傾向の違いは見られなかった。また、安定型/不安定型の2分類においても同様であった。

<引用文献>

Bowlby, J. (1969). *Attachment. Attachment and loss: Vol. 1. Loss*. New York: Basic Books.

Bowlby, J. (1988). *A secure base: Parent-child attachment and healthy human*

development. New York: Basic Books.

George, C., & Solomon, J. (1990). Six-year attachment doll play classification system. Oakland, CA: Mills College (1990, 1996, 2000). Unpublished manuscript.

George, C., West, M., & Pettem, O. (1997). Adult attachment Projective. Unpublished manuscript.

George, C., Kaplan, N., & Main, M. (1984). Adult Attachment interview. Unpublished manuscript, University of California. Berkeley.

Katsurada, E., Tanimukai, M., & Akazawa, J. (2017). A study of associations among attachment patterns, maltreatment, and behavior problem in institutionalized children in Japan. *Child Abuse & Neglect*, 70, 247-282. <http://dx.doi.org/10.1016/j.chiabu.2017.06.018>

2017.06.018

古村健太郎・村上達也・戸田弘二 (2016). アダルト・アタッチメント・スタイル尺度 (ECR-RS) 日本語版の妥当性評価. *心理学研究*, 87, 303-313.

McCarnell M., & Moss, E. (2011). Attachment across the life span: Factors that contribute to stability and change. *Australian Journal of Educational and Developmental Psychology*, 11, 60-77. Website: www.newcastle.edu.au/journal/ajedp/

島井哲志・大竹恵子・宇津木成介・Lyubonirasky, S. (2004). 日本語版主観的幸福感尺度 (Subjective Happiness Scale; SHS) の信頼性と妥当性の検討. *日本公衛誌*, 51, 845-852.

谷冬彦 (1998). 青年期における基本的信頼感と時間的展望. *発達心理学研究*, 9, 35-44.

山川賀世子 (2006). 幼児の愛着測定 - Attachment Doll Play の妥当性の検討-. *教育心理学研究*, 54, 476-486.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 山野莉瑚・桂田恵美子	4. 巻 48
2. 論文標題 両親のジェンダー観・夫婦関係と大学生の愛着スタイルの関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学心理科学研究	6. 最初と最後の頁 35-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 原田萌・桂田恵美子	4. 巻 48
2. 論文標題 幼少期の身体接触経験と現在の接触抵抗感や愛着との関連	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学心理科学研究	6. 最初と最後の頁 43-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 竹谷玲香・桂田恵美子	4. 巻 48
2. 論文標題 父親から子への愛着の検討 - イクメン意識と育児参加に焦点を当てて -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 関西学院大学心理科学研究	6. 最初と最後の頁 49-54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 谷向みつえ	4. 巻 19
2. 論文標題 トラウマとアタッチメントの問題が混在するところ 社会的養護の子どもの支援にむけて	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西福祉科学大学心理・教育相談センター紀要	6. 最初と最後の頁 19-23
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 谷向みつえ	4. 巻 -
2. 論文標題 施設で生活する子どもにとって友だちとは	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ベネッセ教育総合研究所チャイルド・リサーチ・ネット CRNウェブサイト	6. 最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 桂田恵美子・谷向みつえ・赤澤淳子
2. 発表標題 児童養護施設入所児童の愛着パターンの安定性：幼児期から青年前期にかけて
3. 学会等名 日本心理学会第86回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 Katsurada, E., Tanimukai, M., & Akazawa, J.
2. 発表標題 Stability of Attachment Patterns of Japanese Children From Preschooler to Teen.
3. 学会等名 SRCD 2023 Biennial Meeting, Salt Lake City, Utah, U. S. (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 赤澤淳子
2. 発表標題 愛着および共感性が怒りの表出に及ぼす影響
3. 学会等名 日本心理臨床学会第40回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 谷向みつえ・桂田恵美子・赤澤淳子
2. 発表標題 児童養護施設入所児童のアタッチメント表象の変化 特定の大人と個別に過す機会に着目して
3. 学会等名 日本心理学会第82回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 桂田恵美子
2. 発表標題 母親の応答性 - 愛着安定型vs不安定型の子の母親の比較 -
3. 学会等名 日本発達心理学会第35回大会
4. 発表年 2024年

1. 発表者名 Katsurada, E., Tanimukai, M., & Akazawa, J.
2. 発表標題 The association of preschool and current attachment patterns with emotional and behavior problems of institutionalized Japanese teenagers
3. 学会等名 27th Biennial meeting of the International Society for the Study of Behavioural Development (国際学会)
4. 発表年 2024年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	谷向 みつえ (TANIMUKAI Mitsue) (20352982)	関西福祉科学大学・心理科学部・教授 (34431)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	赤澤 淳子 (AKAZAWA Junko) (90291880)	福山大学・人間文化学部・教授 (35409)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関